

早期合格者の特性を反映させた入学前教育プログラムの設計と効果

露木 隆, 西郡 大 (佐賀大学)

本研究では、早期合格者の特性を踏まえ、学習意欲の維持・向上と基礎学力の定着を目的とした入学前教育プログラムを設計し、実施した。受講者に対する事前、事後調査等の結果から、受講者のおよそ9割が大学生活のイメージの獲得や大学入学後の目標の明確化、さらに、学習意欲の維持・向上や学習習慣の維持へのプログラムの有効性を実感していることが明らかになった。特に合格者同士や先輩との交流や入学後の目標を発表する機会は入学前の学習意欲の向上に高い効果が期待できることが明らかになった。

キーワード：入学前教育、特別選抜、高大接続

1 はじめに

これまで、学習意欲の維持・向上や基礎学力の定着、学習習慣の維持を目的として、多岐にわたる入学前教育が実践されてきた。しかし、学習意欲を継続・向上させ、基礎学力も定着させる入学前教育プログラムとはどのようなものか、各大学共通のコンセンサスが形成されているわけではない。そもそも、学習意欲の維持・向上や基礎学力の定着に効果的な入学前教育プログラムの内容やその要因についての研究例は少なく、それが入学前教育の実質化に向けたプログラム設計を困難にしている可能性があると考えられる。

本研究は、露木 (2025) によって明らかになった早期合格者の特性に関する知見を踏まえ、入学前教育プログラムを設計する。さらに、令和6年度の早期合格者を対象に設計したプログラムを実施し、事前、事後調査等を通じて、学習意欲の維持・向上や基礎学力の定着に有効なプログラムの内容と、その要因を明らかにすることを目的とする。

2 早期合格者の特性に関する知見

露木 (2025) は令和5年度のS大学の特別選抜試験による早期合格者220名を対象とした調査により、入学前教育の設計に向けた早期合格者の特性として以下の5点を明らかにしている。

- ① 全員が一律に同じ難易度の課題を与えられた場合、学習意欲が低下する場合がある。一方、大学での学びがイメージできるような課題は、学習意欲が向上する可能性がある。
- ② 入学直後のもっとも大きな気持ちとして期待や安心といったポジティブな感情よりも、学力面や対人面での不安を強くもつ合格者が多い。
- ③ 親和力や協働力といった能力に自信をもつ早期合格者が多い。実際にコンピテンシー調査の結果で

もそれらの項目で一般選抜による合格者と比較して有意差が確認された。

- ④ 高校から共通テストの受験を課せられている早期合格者の割合は必須、希望制を合わせて全体の65.2%である。一方、課題を何も課されていない早期合格者も29.7%おり、一律に同じ分量の課題を課した場合、合格者によって負担感に大きな差が生まれる。また、入学までの学習意欲の維持・向上のために「求めるプログラム」としては、大学のカリキュラムや授業の紹介、大学の授業の先行履修、学部先輩のインタビュー、合格者同士や先輩との交流会、プレゼンや論文の書き方指導等、大学の学びや生活がイメージできるものや入学後に必要なスキルを身につけられるものが多い。
- ⑤ 九州7県125名の高校教員の58.6%が早期合格者の課題として、合格決定後に学習意欲が低下し、一般選抜の生徒との間に温度差が見られるといったことを感じている。また、95.2%が学習意欲の維持・向上を目的とした入学前教育の必要性を示している。

3 令和6年度入学前教育プログラムの設計

3.1 入学前教育プログラムのコンセプトの検討

本研究では、露木 (2025) が明らかにした早期合格者の特性に関する知見を基盤として、入学前教育プログラムのコンセプトを検討した。

まず①の知見に関して、従来の入学前教育では大学側が一律に復習課題を課す方式が一般的であり、先行研究でも数学・英語の補講やeラーニングが中心であった。しかし、早期合格者調査からは、画一的課題は学習意欲の低下を招く可能性が示されている。むしろ大学の学びの特徴や専門的内容を具体的に理解できる課題の方が意欲を高めると考えられ、大学の学び方を体験的に捉え

られる構成が求められる。(3.2節, 3.3節, 3.6節と関連)

また②の「学力面・対人面の不安」は、高大接続期に特有の課題であり、山本ほか(2024)の指摘する「カレッジ・レディネスの不足」とも一致する。不安の背景には、大学での学び方や入学後に求められる能力・生活像を十分に描けていない点がある。そのため、本研究では高校と大学の学びの違いや大学生活の具体像を理解させる内容を中核に据えることとした。(3.2節, 3.3節, 3.5節と関連)

さらに③の協働力の高さは、交流活動やグループワークに適応しやすいという特徴を示す。実際に受講者が求めるプログラム要素にも先輩との交流や合格者同士の対話が挙げられており、これらは不安軽減と学習意欲向上の双方に寄与すると考えられる。したがって、本プログラムでは協働的な学びや対話的活動を積極的に取り入れる方針とした。(3.5節と関連)

加えて④⑤の課題負担の差や学習意欲低下に関する知見は、従来型の入学前教育が抱える限界を示す。大学が一方的に復習教材を提示する方式では、高校生が主体的に計画し、自律的に学ぶという大学で求められる姿勢の育成にはつながりにくい。むしろ大学での学習を見据え、自ら目標を設定し、計画的に取り組む経験を提供することが、カレッジ・レディネスの向上につながる。(3.2節, 3.3節, 3.4節と関連)

以上の知見を踏まえ、本研究では「大学の学びを具体的に理解し、自ら学習計画を立て主体的に学ぶ力を育成する」ことをコンセプトとした入学前教育プログラムを設計した。大学のカリキュラムや研究内容の理解、大学での学び方の可視化、先輩学生や教員との交流、自主的な計画に基づく課題遂行などを通じて、学習意欲の維持・向上、不安の軽減、基礎的学習能力の確保を図り、高大トランジションの円滑化を目指すものである。

3.2 学びの指針となる入学前学習テキストの作成

プログラムの意図や学びの方向性を示すことは入学前教育を充実させる意味で非常に重要である。そのため、いつ何をどのようにやって欲しいのか、それぞれのプログラムの目的は何であるのかについて、受講者が入学前学習の方向性を常に確認できるように入学前学習テキストを作成することとした。

テキストの内容としては、冒頭に「高校と大学のちがひ」について詳細に解説する部分を設けた。本研究で設計する入学前教育プログラムは高大トランジションの達成を目的としており、そのためには大学における学び方を理解することが重要である。特に、大学では高校以上に計画性を持ち、主体的・自律的に学ぶ必

要があることを受講者に理解させることを意図した。また、大学側から特定の課題が与えられるのではなく、学習者自身が取り組む内容を計画し実践するというプログラムの設計意図についても理解を促すこととした。その上で、受講者それぞれが高校から課せられている課題量に応じ、大学の学びの基礎となる学習内容を計画的に効率よく学習できるよう、「大学の学びに必要な高校の学習内容」について各学部、学科、分野、コース毎に掲載し、それらの内容を踏まえ「3ヶ月間の学習計画表」を作成させる。さらに、大学4年間の時間割や実習、研究・ゼミ、授業シラバスの見方、推薦図書・動画について各学部、学科、分野、コース毎に詳細に掲載し、その他、大学の留学や起業支援、キャリア形成の考え方についても掲載することで、大学4年間のイメージを獲得させ、最終的に「大学生活目標設定シート」を作成させる設計とした。

3.3 テキストの内容と連動した動画教材の制作

受講者のテキストの内容の理解をより深めることを目的に、テキスト内容と連動する動画教材を制作した。

「高校と大学のちがひ」をテーマとする動画教材では、テキスト内容をイラストやナレーションを用いて分かりやすく解説するとともに、大学生活を充実させるために必要な資質・能力について学習者自身に考察を促す内容とした。また、テキスト作成に関わった全学生へのインタビューを撮影し、授業、実習、研究内容の紹介に加え、就職活動、部活動、アルバイトなどを含む4年間の大学生活について説明するとともに、大学生に求められる資質・能力や入学前に取り組むべき事項についてアドバイスを提供する動画も制作した。

その他、受講者が自らのキャリア形成を考える際に大学のどういった支援を活用するのかについての視点も与えることを目的に、留学や起業経験のある学生が自らのキャリア形成の中で、なぜ留学や起業という選択をしたのかについて説明したり、留学生交流室、社会連携課、URA等、学内の様々な組織と連携し、大学の様々な支援制度や支援体制について説明したりする内容の動画も制作した。

3.4 学習支援クラウドシステムによる学習環境の構築

学習支援クラウドシステム(Moodle)を活用した入学前教育については、大塚ら(2019)が医学部医学科のAO入試Iの合格者を対象にMoodleを用いたディスカッション等を入学前教育で実施したことで、合格者間及び、教員と合格者の交流が実現し、学習習慣の維持に一定の効果があつたことを報告している。

本研究においては、交流を目的とした使用はないが、高校から課されている課題内容に関わらず、取り組む時期や時間に柔軟に対応可能であることや、早期合格者が入学後に必要なスキルを身につけられるプログラムを求めているといった点を考慮し、大学の授業で広く利用されているMoodleを活用することにした。これにより、大学の授業のイメージが獲得できるだけでなく、動画の視聴や「3ヶ月間の学習計画表」、「中間成果報告書」、「大学生活目標設定シート」等のデータの提出、学習の達成状況の把握が容易となるため、学習に取り組みやすくなることが期待できる。また、テキストや動画によりインプットした知識に対し、自分の意見や感想をまとめ、担当教員に提出するといったアウトプットの機会を設けることは、学習内容の理解を深める上でも有効なのではないかと考えた。

3.5 早期合格者のニーズを反映した交流会の設計

3.5.1 入学前交流会（12月）

早期合格者の特性に関する調査において、入学前の学習意欲の向上に有効なプログラムとして早期合格者のおよそ8割が挙げた「合格者同士の交流会」や、およそ6割が挙げた「先輩との交流会」の実施を軸として、入学前教育の目的や、大学の留学支援についても理解を深めることを目的とした入学前交流会を入学前教育の開始時期となる12月に計画した。入学前交流会のプログラムを表1に示す。

先輩との交流会では各学部、学科、分野ごとの学生スタッフによる「授業内容やカリキュラム紹介」、「研究やゼ

表1 入学前交流会のプログラム

1	挨拶(5分)
2	入学前学習の進め方(35分)
	・入学前教育プログラムの目的
	・入学前学習テキスト、Moodleの使用方法
3	留学支援の紹介(20分)
	・留学経験談と大学の留学支援の紹介
	・トビタテ留学JAPANの紹介
4	学部別会場へ移動・自己紹介(30分)
5	昼休み(60分)
6	学部別交流会(40分)
	・学科、ゼミ、研究紹介
7	交流会、先輩への質問コーナー
	学習計画表の作成、発表(50分)
8	アンケート記入(10分)
9	解散・個別質問対応

ミ紹介」を実施する。また、3ヶ月間の学習計画表を先輩学生や他の参加者に相談しながら完成させ、その後、お互いの学習計画を発表し合う時間を設けた。なお、県外居住の受講者も多数いることから、参加は希望制とした。

3.5.2 中間成果報告会（2月）

入学前教育プログラム開始から1ヶ月半という中間の時期に、中間成果報告会を学部毎にオンライン実施で計画した。1ヶ月半の期間で、できたこと、できなかったこと、今後挑戦してみたいこと、不安や悩み、先輩への質問等を入学前教育プログラムの中間成果報告書として提出するため、中間成果報告会では報告書に記述した内容に沿って1人1分程度で発表することとした。また、各学科から学生スタッフや教員も参加し、発表者の質問に答えたり、相談内容にコメントをしたりするように計画した。なお、開催日時はこちらで指定したため、日程に都合がつかない場合を考慮して参加は希望制とした。

3.5.3 最終成果報告会（3月）

入学前教育プログラムの総括として、対面による最終成果報告会を入学式直前となる3月末に計画した。最終成果報告会のプログラムを表2に示す。

早期合格者は親和力や協働力といったコンピテンシーが高いといった特性を生かし、「なぜ大学で学ぶのか」といったテーマで議論してグループの意見をまとめたり、事前に提出する大学生活目標設定シートに記述した内容に沿って、3ヶ月間で取り組んだことや大学入学後の目標を1人2分程度で発表したりするといった内容を計画した。なお、グループワークの実施に当たっては、大学で必要な知識やスキルを身につけるといった視点から、ブレインストーミングやKJ法について事前に学習し、それらの手法を用いてグループ討議するよう計画した。

また、学習者同士の対面での交流は12月以来と期間が空いたことから、グループワークを実施する前にアイスブレイクが必要であると考え、大学内の様々な施設を知る機会にもなることも期待して学内ウォークラリーイベントも計画に含めた。

3.6 教養科目の先行履修プログラムの導入

先行研究において、早期合格者のおよそ3割が学習意欲の向上に「大学の授業の先行履修」が有効であると回答していたことから、本研究においても大学で実際に開講されている教養科目を先行履修することができる入学前教育の発展プログラムを導入した。

表2 最終成果報告会のプログラム

1	挨拶(5分)
	入学前学習のまとめ(30分)
2	・入学前教育の目的の確認と3ヶ月間の振り返り ・アンケートと追跡調査の依頼
	産学連携から見た大学の取り組み(30分)
3	・産学連携による研究紹介 ・入学後の行動指針への助言
4	学部別会場へ移動・自己紹介(45分)
5	昼休み(60分)
6	交流イベント(90分) ・学内ウォークラリー
7	学部別グループワーク①(40分) ・「なぜ大学で学ぶのか」に関する議論
	学部別グループワーク②(40分)
8	・「3ヶ月間の取り組み」発表 ・「大学4年間の目標」発表
9	アンケート記入(10分)
10	解散・個別質問対応

具体的には、教養科目として全学部の学生を対象に開講されている「STEAM 学習基礎」の授業について希望者を対象に科目等履修生として履修させ、基準を満たした場合は入学後に2単位を認めるものである。これまでも熊本大学がグローバルリーダーコース入試で合格した学生を対象に先行履修を行った例(平ほか, 2025)等、特定の選抜区分の合格者に対し大学の授業を先行履修させるプログラムが報告されているが、本プログラムにおいては、すべての学部の学校推薦型選抜及び総合型選抜による早期合格者が履修可能となるように大学の規則も含めて整備を行った。

なお、授業は共通テストを受験する受講者が多いことを考慮して2月からの開講とし、Moodleを用いて1ヶ月半のオンデマンドによる講義と、2日間の集中講義を実施するよう計画した。

4 入学前教育プログラムの実施と検証結果

4.1 調査対象

本研究の調査対象はS大学の教育学部、経済学部、医学部、理工学部の令和6年度の学校推薦型選抜及び総合型選抜の年内合格者153名とした。なお、インフォームドコンセントの観点より、各調査の実施及び分析は、事前に文面又は口頭で調査の目的や研究への使用について説明し、入学前教育プログラムの受講者及び学生スタッフの同意を得た上で行った。

4.2 事前調査の結果

令和6年12月、受講者の入学前教育実施前の状況を把握するため、事前調査を実施した。入学前教育受講者の合格者送付書類に事前調査に関する通知と、Microsoft FormsによるアンケートフォームのQRコードを記載した資料を添付したところ、153名からの回答が得られた。

図1に高校から課されている課題についての調査結果を示す。図より、必須と希望制を合わせると、受講者の75.7%が共通テストの受験を課せられているのに対し、何も課されていないといった受講者も18.4%存在することが分かる。

図2に学習意欲を向上させるために効果があると考えられる入学前教育プログラムの内容についての調査結果を示す。図より、合格者同士や先輩との交流会、ゼミや研究、カリキュラム紹介、大学の授業の先行履修を求める意見が多いことが分かる。

表3に大学入学後への不安の有無に関する調査結果と、「不安がある」と回答した場合の「不安の内容(複数選択可)」に関する調査結果を示す。表より、受講者の76.5%が「不安がある」と回答しており、その内容としては学業面や対人面に関する不安が大きいことが分かる。

これらの結果は、本研究で入学前教育プログラム設計の基となった露木(2025)が明らかにした同大学の早期合格者の特性に関する知見と同様の傾向を示し

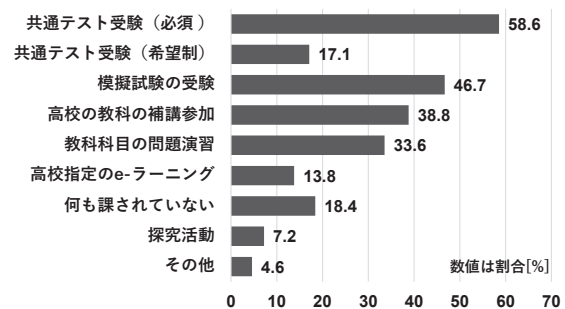


図1 受講者が高校から課せられている課題

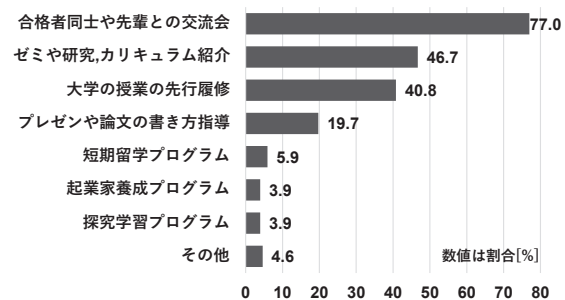


図2 受講者が求めるプログラム

表3 大学入学後への不安の有無（事前）

回答	割合	不安の内容	割合
不安はない	23.5	-	23.5
不安がある	76.5	学業面（授業についていけないなど）	66.7
		対人面（友達ができるかなど）	46.4
		生活面（一人暮らしなど）	26.1
		金銭面（学費や生活費など）	24.2

※数値は回答者(153名)に対する選択者の割合[%]

ており、S大学における早期合格者の一般的な特性を示していると考えられる。よって、本研究で設計した入学前教育プログラムは本研究の調査対象の意向が反映されたものであるとも考えることができる。

4.3 入学前交流会（12月）の実施とアンケート結果

令和6年12月26日に対面形式で入学前交流会を実施し、4学部から受講者のおよそ83.7%にあたる128名が参加した。また、学生スタッフは24名、教職員は6名参加した。事前調査の結果より、多くの参加者は学部教員よりも先輩や同級生との交流を望んでいることが想定されることから、入学前教育全体の説明と留学支援の説明以降は学生スタッフが運営した。

入学前交流会実施後のアンケート調査の結果では、85名から回答が得られた。入学前交流会の満足度に関する項目では、「満足」91.8%、「やや満足」8.2%で、「どちらでもない」「やや不満」「不満」はいずれも0%であった。理由としては、「新しい友達ができて不安が解消された」、「先輩から様々な話を聞くことができた」といった内容のものがほとんどであった。また、学習意欲の向上に有効なプログラムをすべて選択する項目では、回答者の84.7%が「合格者同士の交流会」、82.4%が「先輩からの学部紹介・大学生活や学習アドバイス」、57.6%が「入学前学習の進め方の全体説明」を選択した。一方、「留学支援の説明」は29.4%ともっとも低かった。その他、入学前交流会は不安や悩みの解消に有効であったかに関する項目では、「そう思う」74.1%、「ややそう思う」21.2%、「もともと不安や悩みはない」4.7%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。また、入学前交流会を通して大学生としての意識は高まったかについての項目では、「そう思う」83.5%、「ややそう思う」16.5%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。

以上の結果から、入学前教育の開始時期に実施する対面での交流会は、多くの受講者の参加が見込めるとともに、学習意欲の向上、不安や悩みの解消、大学生

としての意識の高まりが期待できることが明らかになった。特に有効なプログラムとしては、「合格者同士の交流」や「先輩との交流」が挙げられる。一方で、早期合格者の特性に関する先行研究において、授業や部活動・サークルに比べて留学や起業への関心が低いことが指摘されていたが、本調査においても「留学支援の説明」は他のプログラムに比べ効果が低い傾向が見られた。これは、早期合格者にとって留学のような将来的な選択肢よりも、授業や部活動等、4月以降すぐに直面する生活上のテーマのほうが不安や悩みの要因となり、関心が高いことが背景にあると考えられる。

4.4 中間成果報告会（2月）の実施とアンケート結果

令和7年2月18日～21日の4日間、16:00～17:00の1時間でオンラインによる中間成果報告会を学部毎に実施した。2月上旬にアンケートフォームによる参加希望調査を行い、4学部から54名の受講者が参加した。学生スタッフは10名、教職員も4名が参加した。参加者は、事前に提出した中間成果報告書の内容に沿って、1ヶ月半でできたこと、できなかったこと、今後取り組みたいと考えていること、先輩への質問について1人1分で話をし、それに対して学生スタッフと教職員がコメントをした。なお、不参加であった受講者が参加希望調査の時点で記述していた不参加の理由としては、「学校がある」、「バイトや自動車学校を入れてしまった」等、日程的に都合がつかないことを理由としているものがほとんどであった。

中間成果報告会後にプログラムの参加者全員に実施したアンケート調査では参加者41名、不参加者69名からの回答が得られた。

参加者の中間成果報告会の満足度に関する項目では、「満足」80.5%、「やや満足」19.5%で、「どちらでもない」「やや不満」「不満」はいずれも0%であった。また、中間成果報告会が学習意欲の向上に役立ったかについての項目では、「そう思う」82.9%、「ややそう思う」17.1%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。回答の理由としては、「同級生も様々なチャレンジをしていることを聞いて刺激を受けた」、「先輩のアドバイスに勇気づけられた」といったものがほとんどであった。また、中には「計画通りに学習できていない自分に危機感を感じ、やる気が出た」、「他にも自分と同じような不安を抱えている人がいて安心した」といった回答も見られた。また、中間成果報告会は不安や悩みの解消に役立ちましたかといった項目では、「そう思う」73.2%、「ややそう思う」24.4%、「どちらでもない」2.4%

で、「ややそう思わない」「そう思わない」「もともと不安や悩みはない」はいずれも0%であった。

以上の結果から、オンライン実施であっても中間期に報告会を行うことは、計画的な学習の継続や学習意欲の向上に有効であったことが示唆された。特に、「もともと不安や悩みはない」と回答した参加者が1人もいなかった点を踏まえると、不安や悩みを抱える受講者にとって、中間期に他の受講者や先輩と交流することが不安の軽減につながる可能性も示唆された。

4.5 最終成果報告会（3月）の実施とアンケート結果

令和7年3月31日に対面形式で最終成果報告会を実施し、4学部から110名が参加した。学生スタッフは17名、教職員は5名参加した。12月の入学前交流会と同様に、入学前教育のまとめの説明と、産学連携から視た大学の取り組みに関する説明以降は学生スタッフが運営した。

最終成果報告会実施後のアンケート調査では、62名から回答が得られた。報告会の満足度に関する項目では、「満足」95.2%、「やや満足」4.8%で、「どちらでもない」「やや不満」「不満」はいずれも0%であった。回答の理由としては、「新しい友達ができた」、「同級生の3ヶ月間の頑張りや大学での目標を聞いて良い刺激をもらった」、「学内を歩いて楽しかった」といった内容のものがほとんどであった。また、学習意欲の向上に役立ったと思うプログラムをすべて選択する項目では、回答者の87.1%が「3ヶ月間の学習成果と大学の目標についてのグループワーク」、64.5%が「大学で学ぶ理由についてのグループワーク」、64.5%が「学内ウォークラリー」、62.9%が「合格者及び先輩との交流」を挙げていた。一方、「入学前学習の目的の確認」は35.5%、「産学連携から視た大学の取り組み」の説明は21.0%と低かった。その他、交流会は不安や悩みの解消に役立ちましたかといった項目では、「そう思う」66.1%、「ややそう思う」25.8%、「もともと不安や悩みはない」8.1%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。また、大学生としての意識は高まったかを問う項目では、「そう思う」80.6%、「ややそう思う」19.4%、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。

以上の結果から、合格者同士や先輩との交流の機会は、学習意欲の向上や不安の解消に効果的であり、大学生としての意識形成にも有効であることが明らかになった。特に、中間成果報告会と同様に、他の参加者の入学前学習の取り組みや入学後の目標を聞く機会を

設けることは、相互に良い刺激を与え、学習意欲の向上に有効だと感じる参加者が多いことも確認された。一方で、教職員が説明したプログラムは、他のプログラムに比べて効果を実感する参加者が少ない傾向が見られたことから、教職員が直接説明するのではなく、学生スタッフを効果的に活用して大学からのメッセージを伝える方法を検討する必要性も示唆された。

4.6 先行履修科目の実施とアンケート結果

教養科目の1つであるSTEAM学習基礎の先行履修を、令和7年2月よりオンデマンドで開始し、3月13日、14日には対面形式での集中講義を実施した。なお、12月時点では4学部から51名が履修を希望していたが、授業開始の2月までに集中講義の日程の都合が悪くなったといった理由や、パソコンの作業環境を用意できなかったといった理由から7名が登録を解除したため、44名が履修し、最終的に単位認定の基準を満たしたのは36名であった。

実施後のアンケート調査では、単位認定の基準を満たした内の35名と、基準を満たせなかった内の6名の合計41名から回答が得られた。まず、授業全体の満足度に関する項目では、「満足」73.2%、「やや満足」12.2%、「どちらでもない」14.6%で、「やや不満」「不満」はいずれも0%であった。なお、「どちらでもない」に回答したのは単位認定の基準を満たすことができなかった6名であった。しかし、「大学の授業を先行履修できることは、入学前の学習意欲の向上や学びへのモチベーションの獲得に有効であると思いますか」といった質問においては、「そう思う」78.0%、「ややそう思う」22.0%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。また、「大学の授業を先行履修することは大学生活のイメージを獲得する上で有効であったと思いますか」といった質問においても、「そう思う」78.0%、「ややそう思う」22.0%で、「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」はいずれも0%であった。

以上の結果から、大学の授業の先行履修は、学習意欲の向上や大学生活のイメージの獲得に有効であり、単位認定の基準を満たさなかった履修者にとっても有効であったことが示唆された。なお、単位認定の基準を満たせなかった主な理由としては、「集中講義の日程の都合が合わず、途中で課題提出を断念した」というものが主であった。3月中旬という時期は多くの高校で卒業式後にあたり、受講者にとって参加しやすいことを想定していたが、実際には一人暮らしの準備、親戚への挨拶、家族旅行等、進学前の物理的・精神的な準備を行う時期でもある。このため、2日間の集中

講義は受講者やその家族にとって負担が大きかった可能性が考えられる。したがって、3月に実施するプログラムについては、こうした点を考慮した上で日程調整を行う必要があることが示唆された。

4.7 事後アンケート調査の結果

令和7年4月に入学前教育全体に関するアンケート調査を実施し、124名からの回答が得られた。

入学前教育全体の満足度に関する項目では、「満足」69.4%、「やや満足」27.4%、「どちらでもない」3.2%で、「やや不満」「不満」は0%であった。

次に、学習意欲の維持・向上、大学入学後の目標の獲得、学習習慣の維持、大学生活のイメージの獲得、基礎学力の定着の5項目について実施した5件法アンケートの結果を表4に示す。表より、いずれの項目においても肯定的回答(「そう思う」「ややそう思う」)がおよそ9割を占めており、本研究で設計した入学前教育プログラムが学習意欲の維持・向上や大学入学後の具体的な目標の獲得等に寄与していることが示唆された。一方で、「基礎学力を身につけたと思いますか」の項目では、「そう思う」と回答した受講者の割合が他の項目と比較して低い傾向が見られる。入学後に求められる基礎学力の内容は学部によって異なることから、学部間で回答傾向に違いが生じている可能性を想定し、学部別の回答割合を比較した。しかし、いずれの学部においても同様の傾向が確認され、学部間に明確な差は認められなかった。

次に、「学習意欲の向上に有効であったプログラム(複数選択可)」の結果を図3に示す。図より、受講者の多くが「入学前学習テキスト」,「Moodleを用いた学習」,12月に実施した「入学前交流会」が特に有効であったと感じていることが分かる。

次に、「入学前学習テキストの中で学習意欲の向上に有効であったテキスト内容(複数選択可)」の結果を図4に示す。図より、受講者の多くが「先輩の時間割紹介」,「先輩のゼミ・研究紹介」が特に有効であったとしており、続いて「高校と大学のちがひ」,「大学の学びに必要な高校の学習内容」であった。

次に、「学習意欲の向上に有効であった動画内容(複数選択可)」の結果を図5に示す。図より、テキストと同様に「先輩学生のインタビュー」が最も有効であり、次に「高校と大学のちがひ」についての解説動画であった。

また、受講者が抱える大学入学後への不安について、事前・事後調査の結果を表5に示す。表より、不安があると回答した受講者の割合は事前から事後にかけて76.5%から60.5%へと低下していることが分かる。この変化について、カイ二乗検定(有意差水準5%)を用いて分析したところ、 $\chi^2=8.230 (> 3.841)$ で統計的有意差が確認された。

さらに、この変化の要因を明らかにするため、不安の内容4項目(学業,対人,生活,金銭)の人数の変化についても同様に分析した。その結果、学業面において $\chi^2=6.463 (> 3.841)$ で統計的有意差が認められ、不安があるとした割合の低下には学業面の不安の低下が寄与していることが示唆された。しかし、事後においても受講者全体の60.5%が何らかの不安を抱えており、特に、学業面への不安は事前から事後にかけて低下したものの、依然として51.6%と高い水準にあることが分かった。なお、事前・事後における不安の有無及び、不安の内容について学部間での差があるかを明らかにするため、対象の4学部について、カイ二乗検定(有意差水準5%)を用いて分析したところ、事前・事後の不安の有無及び、不安の内容4項目において、学部間での統計的有意差は認められなかった。

「入学後の学習への意欲」について自由記述を求めた別の質問において、124人中23人の回答に「不安」という単語が含まれており、その多くは「学習意欲はあり、大学の授業は楽しみだが、実際に受講してみなければついていけないか分からないので不安」といった記述内容であった。この内容も踏まれば、大学側は入学前にすべての不安を解消することを目指すのではなく、入学前教育と初年次教育を関連させたようなプログラムを提供することで、入学前後に様々な学習経験をさせながら、徐々に不安を解消させていくことを目指す必要があることが示唆された。

表4 入学前教育プログラムの効果に関するアンケート調査の結果

質問	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	ややそう思わない	そう思わない
入学前教育は学習意欲の維持・向上に役立ったと思いますか	66.9	25.8	6.5	0.8	0
入学前教育は大学入学後の具体的な目標を持つことに役立ったと思いますか	66.9	28.2	4.8	0	0
入学前教育は入学までの学習習慣を維持することに役立ったと思いますか	53.2	37.1	8.1	1.6	0
入学前教育は大学生活のイメージを獲得することに役立ったと思いますか	76.6	22.6	0.8	0	0
入学前学習を通して入学後の学部の学びに必要な基礎学力を身につけたと思いますか	45.2	41.9	11.3	0.8	0.8

数値は割合[%]

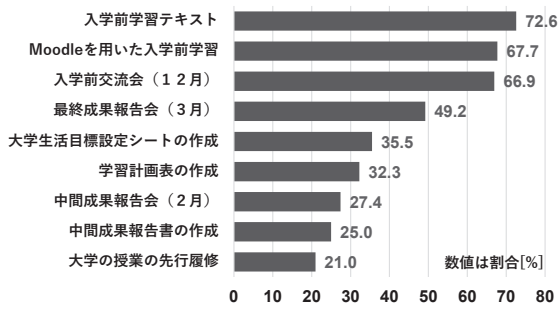


図3 学習意欲の向上に有効だと考えるプログラム

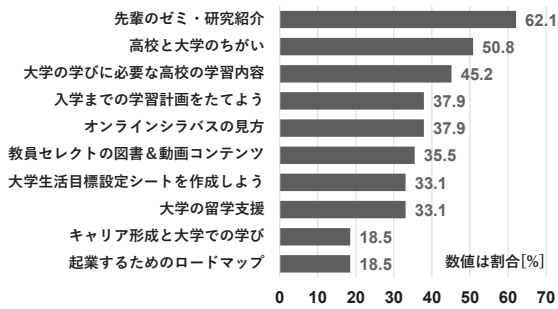


図4 学習意欲の向上に有効だと考えるテキスト内容

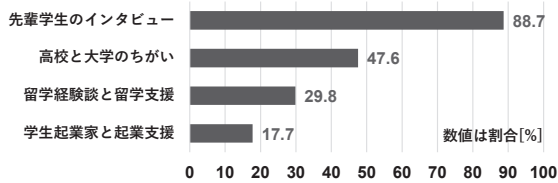


図5 学習意欲の向上に有効だと考える動画内容

表5 大学入学後への不安の有無(事前・事後)

回答	事前調査(153名)		事後調査(124名)			
	割合	不安の内容	割合	不安の内容	割合	
不安はない	23.5	—	23.5	39.5	—	39.5
不安がある	76.5	学業面	66.7	60.5	学業面	51.6
		対人面	46.4		対人面	41.1
		生活面	26.1		生活面	19.4
		金銭面	24.2		金銭面	18.5

※数値は回答者(事前153名,事後124名)に対する選択者の割合[%]

以上の結果から、本研究で設計した入学前教育プログラムは、早期合格者の学習意欲の維持・向上、学習習慣の維持、大学生生活のイメージ形成、入学後の目標の明確化に有効であるが、学部の学びに必要な基礎学力が身に付いた実感や、学習面等に関する入学前の不安の解消には課題が残ることが明らかになった。

入学前教育プログラムの効果を支える要因としては、「先輩による時間割紹介」「先輩のゼミ・研究紹介」「高校と大学の違い」「大学での学びに必要な高校の学習内容」「合格者同士の交流」「先輩との交流」「合格

者による取り組みや目標の発表」といったコンテンツが重要であることが示唆された。

5 まとめと今後の展開

本研究では、早期合格者の特性を踏まえた入学前教育プログラムを設計・実施し、その効果を検証した。その結果、学習意欲の維持・向上、学習習慣の定着、大学生生活のイメージ形成、入学後の目標の明確化に高い効果が認められた。特に、合格者同士や先輩との交流、目標発表の機会などが学習意欲の向上や大学生としての意識形成に有効であることが明らかとなった。

一方で、学部ごとに求められる基礎学力の定着や、学習面等に関する入学前の不安の解消には課題が残ることも示された。今後は、受講者自身が基礎学力を身につけた実感を持てるプログラムの開発や、不安解消に向けた要因のさらなる調査が必要である。また、個々の受講者の変容や入学後の成果(学部、単位取得状況、GPA、授業出席、留学経験等)についても追跡調査を行い、入学前教育プログラムが大学入学後に与える影響をより詳細に検証していきたい。

なお、本研究の対象は1大学に限定されており、すべての大学に一般化できるものではない。今後は調査対象校を拡大し、早期合格者の学習意欲の維持・向上や基礎学力の定着等に有効な入学前教育プログラムとその要因に関する知見の一般化を目指す。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP25K17035及び、JP25K00814の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 大塚智子・関安孝・喜村仁詞・武内世生(2019)。「インターネットを介した入学前教育「高知大学入学前moodle」」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 29-35.
- 平英雄・シムズランダー・ブライアント・中村謙太(2025)。「高大接続教育のための熊本大学肥後時修館の実施とこれまでの成果」『大学入試研究ジャーナル』**35**, 255-262.
- 露木隆(2025)。「入学前教育プログラムの設計に向けた早期合格者の特性分析」『大学入試研究ジャーナル』**35**, 95-102.
- 山本以和子・花堂奈緒子・林寛子・富山明華・陣内未来(2024)。「高大接続改革に係る入学前教育の実施状況と課題」『大学入試研究ジャーナル』**34**, 182-189.